

今週のお薦めレコード



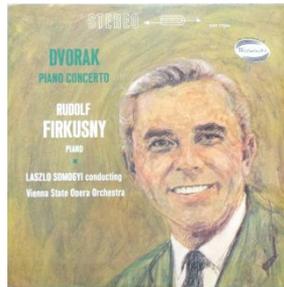
このレコードを聴きたい

第8053番 税込み4400円



R.シュトラウス ドン・キホーテ
フルニエ(vc)、カッポーネ(va)/BPO/カラヤン
独DG/139009/1965年録音/ステレオ/G
登場時からフルニエはセンスがある。心優しいドン・キホーテであり、オーケストラもしっかりと呼吸を合わせて歌い進める。カラヤンは描写音楽に的を絞っているようだ。細やかに心配り、時には甘い空気を漂わす。いつものカラヤン美学だが、R.シュトラウスの音楽はそれを自然に受け入れてくれる。カラヤンは若い時からR.シュトラウス演奏の名手であるが、年を経て耽美主義は嵩を増し、しなやかで美しくなる。その生きる場がこの作品では極めて多いので、聴く者は何度も溜息をつく。フルニエの美音もカラヤンの色合いと自然に混ざり合っ、大きな流れを作っていく。こうした演奏には心を預けてしまうのが一番良い。(山田)

第8054番 税込み3300円



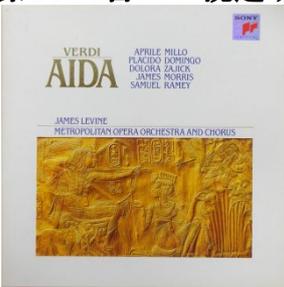
ドヴォルザーク ピアノ協奏曲
フィルクスニー(p)/ウィーン国立歌劇場管/ショモギ
米ウェストミンスター/WST17044/1963年録音/
ステレオ/オリジナル/G
戦後アメリカで生活しながらも、演奏会のプログラムには必ずチェコ音楽を入れたというフィルクスニーのお国物への愛着はこの演奏にも現れている。アクティヴで揺るぎない演奏、勿論過度に身ぶりの大きなアップールではなく、作曲家の思いを的確に伝えると言う使命感から生まれたもので、チェコの雰囲気伝えることとは違う。例えば早いパッセージでの技巧をひけらかせずに見事なコントロールを見せる技などにそれは現れている。ハンガリーの指揮者とウィーンのオーケストラとの相性も良く、現代の美しくまとまった演奏とは大きく違った往年のヴィルトゥオーゾの姿を体験できる。

第8055番 税込み5500円



シューベルト ピアノ・ソナタ第21番
ベートーヴェン 同第26番、ハイドン:同第49番、他
ゼルキン(p) 『ライヴ・アット・カーネギー・ホール』
独CBS/79216/2枚組/1977年ライヴ録音/G
ウィーンに生まれ、またはウィーンで過ごした作曲家の名曲を並べているのはゼルキンの狙いだらう。これは全米に放映されたステージでの演奏であり、映像を観たらもっと刺激的な部分に気付いたに違いない。ハイドンから始まるが、既にロマン派的なアプローチで、テンポの揺れ、間の取り方、小さなルバートなどが見られ、年代を追ってシューベルトまで一貫して姿勢を大きくは崩さない。勿論ベートーヴェンは恰幅の大きな演奏となるが、それでも、落ち着いた思索の巡らし方などに違いはない。この姿勢はシューベルトに最もよく合うようで、声優が朗読するかの如く流暢に音楽に語る。(山田)

第8056番 税込み8250円



ヴェルディ アイーダ
ミッロ(S)、ドミンゴ(T)、ザジック(Ms)、レイミー(Bs)
メトロポリタン歌劇場管&合唱団/レヴァイン
米ソニー/S345973/3枚組/1990年デジタル録音/G
メトロポリタン・オペラの強カメンバーによる大オペラ。アプリーレ・ミッロは素晴らしい歌手だ。オでのガラ・コンサートでは一番拍手が大きかった。その伸びやかな声は、美しさだけでなく深い感情が籠っているのだ。彼女は声量を落として響きだけで尾を引くように締め括る場面威力を発揮する。ザジックもまた正確な声を持っており、このオペラの軸は二人の女の確執にあるだけに、このレコードの配役は素晴らしい。L. プライス以来のアイーダ歌手を聴けるのがこのレコードである。勿論馬も登場する壮大さはここでは味わえない。(山田)